

□能登半島地震被災地巡検記録【珠洲市寺家下出区でのヒアリング】

防災都市計画研究所 吉川忠寛

■1. 概要

- (1) 日時 … 2026 年 6 月 15 日(月) 13:30-14:30
- (2) 場所 … 下出集会場(珠洲市三崎町寺家子 34)
- (3) 対象 … 寺家下出区長 出村正廣氏
- (4) 目的 …
 - 1) 下出区における防災活動の概要(能登半島地震以降)
 - 2) 「シン避難訓練・茶話会(第1回)」の概要(2025 年 10 月 30 日実施)
 - 3) 訓練参加者による「訓練記録」などのまとめ(暫定版)
 - 4) 要支援者避難支援訓練の検証(暫定版)
 - 5) 2026 年度の珠洲市の動向

■2. 下出区における防災活動の概要(能登半島地震以降)

- 能登半島地震以降の防災活動を時系列に整理
 - 2024 年 4 月以降、能登半島地震後の下出区住民による避難行動や避難生活などに関するヒアリング調査の後、5 月 30 日から、地震発生当時お住まいの全住民 80 人(35 世帯)に対するアンケート調査を実施した(回収数 80 人だが、これには、帰省中で津波を経験した元住民を含む)※。
 - ※【別紙】吉川忠寛、令和 6 年能登半島地震での津波避難行動の要因分析～石川県珠洲市三崎町寺家下出区の事例～、土木学会西部支部、第 24 回都市水害に関するシンポジウム論文集、2025 年 11 月。
 - 9 月 29 日、住民アンケート調査の結果報告会・茶話会(第1回避難訓練検討会)を開催し、津波避難行動に関する教訓の整理、課題出しなどを行った。この頃、参加者が最も多く、震災経験を熱心に語り合う雰囲気があった。
 - その後、2025 年10月まで4回の住民参加型による避難訓練検討会・茶話会を重ねた。その中には、地域社会と危機管理研究所メンバーの参加(第2回)や東日本大震災に学ぶシンポジウムの開催(第3回)も含まれる。
 - 2025 年 10 月 30 日、これまでの調査結果や災害教訓を踏まえた「あえて厳しい前提条件」による新しい避難訓練、「シン避難訓練・茶話会(第1回)」を開催し、参加住民による「訓練記録」の提出もあった。
 - 区長は「こうした(震災前後の防災活動の)積み重ねが下出区の防災力を高めてきた」と評価する。
 - また、検討会や訓練の場が、住民同士の顔合わせ・語り合いの機会にもなっている。

■3. 「シン避難訓練・茶話会(第1回)」の概要(2025 年 10 月 30 日実施)

- (1) 訓練の特徴
 - 1.1 地震の教訓を踏まえ、あえて厳しい条件を設定(震度 5 弱、津波高 15m、到達時間 16 分後)
 - ハンドベルを避難開始合図として使用
 - 要支援者の避難支援を 2 パターンで実施
 - 津波監視班など役割分担を明確化
 - 訓練記録を住民自身が記入
 - 区長は「初めての試みが多かったが、次回はもっとスムーズにできる」と述べた。

(2) 訓練の概要

寺家下出区「シン避難訓練（茶話会）」

◆ 2025年10月30日(木) 午後2時30分～、自宅から ◆

訓練シナリオ	新しい試みです！
□2時30分 地震発生（平日昼間、震度5弱）	これで避難を考えて！
□2時33分 大津波警報発表・避難指示	ハンドベルが合図！
□2時 分 「避難開始までにやること」 用紙に記入	記録用紙は事前配布
□2時 分 避難開始 ～声かけ	要支援者の避難支援！
□2時 分 下出集会場に避難	役割分担(用紙回収・津波監視・物資等)
■2時46分 津波襲来（16分後、15mの高さ）	
□3時～ 茶話会（反省会） (その後) 打ち上げ	避難で気になったことは？



■4. 訓練参加者による「訓練記録」などのまとめ（暫定版）

(1) 訓練参加率

- 今回の訓練参加者数は、実際に避難場所に避難した人が 21 人で、平日昼間の在宅者 33 人の約 7 割を占める。
- また、仕事や用事などで外出している人で安否確認のやり取りに参加した人(7人)を含めると、訓練参加者数は合計 28 人になる。
- 今回の参加状況について、区長は「人数としては十分」との評価であった。

(2) 避難判断の難しさ

- 今回の訓練を通じて気付いた「避難課題」については、「小さな地震では避難判断が難しい」との回答が最多であった。
- 想定地震（震度5弱）では、住民は「様子見」をしがちであり、実際の地震時に今回のような迅速な避難ができるかは分からないとの不安の声が聞かれた（第4回検討会では、24 年能登半島地震よりやや揺れが小さかった 23 年地震の時に、高台に避難したという声をあまり聞かなかったとの意見が出されていた）。
- 今後の課題としては、避難の「準備時間」を減らすための啓発や、「移動時間」を減らすための移動方法の見直しなどが考えられる。

(3) 避難時間（準備時間+移動時間）の分析

- 想定津波（到達 16 分・高さ 15m）に対して、24%の住民が「逃げ遅れ」の判定となった。このことは、避難の「準備時間+移動時間」が津波の襲来時間に間に合わないことを示している。
- 多くの住民が、実際の 1.1 よりも早く行動しているにもかかわらず、このような厳しい結果となったことをどう受け止めるかが、今後の課題解決を左右する論点と考える。

(4) 要支援者避難支援方法の課題

- 2ケースともに避難時間に余裕がなく、玄関の段差や神社の急な階段といった歩行上のリスクも確認された。
- また、ケース別では、①乗車までの準備時間が長い場合と、②神社の急な階段という移動時間が長い場合があった。改善策としては、①は玄関の段差や通常と異なる乗車方法の改善、②搬送具や搬送法の検討などが考えられるが、支援者・要支援者による事前の下見と打合せが欠かせない。

(5) 訓練中の突然の体調不良への対応

- 一人暮らしの E さんが訓練中に体調不良で自宅玄関で動けない状態になった。そこに、近隣で要支援者役の D さんが、避難の声かけのために E さん宅を尋ねた時にそれに気づき、区長に連絡した。E さん宅に駆け付けた区長が 119 番通報し、救急搬送してもらった。一時的な体調不良だったようで、その後すぐに回復したという。
- 今回は S さんと区長の迅速な緊急対応の結果、大事に至らずに済んだ。この教訓を今後の訓練シナリオにも反映されたい(避難途上などでの要救助者への救援活動)。

(6) ハンドベルが一部に聞こえなかった

- ハンドベルを鳴らす範囲(ルート)・鳴らし方の現状把握と今後の対応を協議する。

(7) 訓練への総合評価

- 全体的な訓練の感想として、8 割が「良かった」と肯定的評価を示した。

(8) 避難路の草木繁茂・夜間の危険性

- 平時に、区長自身が避難路の草刈りや集会場などの施設管理を担っているが、高齢化もあり、負担感の大きさが課題となっている。他方、草刈りを怠ると、夜間の避難はとくに、すべる、転ぶなどのリスクが高まる恐れもある。
- 今後は、区長が抱える各種作業の分担をどう進めるかが課題といえる。

(9) 住民全体の防災意識の向上が必要

- 下出区住民の防災意識も「二極化」の傾向にあることから、消極的な方々への意識啓発が必要。
- 今後も、能登半島地震の災害教訓の継承、避難訓練の継続、地区防災計画の策定などの活動の継続が求められる。

■5. 要支援者避難支援訓練の検証(暫定版)

(1) ケース①: 自宅前での車による搬送支援

- 支援者を予め特定せず、支援者が自らの車避難のタイミングで要支援者宅を通りかかった際に玄関口で要支援者を車に乗せて搬送するという訓練シナリオを実践した。
- 1.1 で実際に要支援者 A さんを背負って避難場所まで階段を駆け上がった B さんが、今回は、車で通りかかった際に A さん宅に立ち寄るというシナリオ。
- すでに玄関口に到達していた A さんは B さんを見て車の方に歩行器を用いて歩み寄った。この時、検証員は、玄関の段差の奥行きと歩行器の幅が不一致であることに気づき、避難時の転倒リスクを指摘した。
- B さんは A さんが車に乗りやすくするため停車位置を少し前に移動した後、A さんを車の助手席に誘導した。しかし、その後の証言で、普段、後部座席に座り慣れている A さんにとって、助手席は少し不安があったという。
- ケース①の避難時間は、避難場所(下出集会場)への到着まで計 16 分を要した(避難準備時間 14 分、車での移動時間 2 分)。この時間は、想定津波の到達時間(16 分)と同じ時間である。

(2) ケース②: 神社社務所からの急な階段を同行支援

- 神社の社務所から社殿までの急な階段を、神社近くの支援者が少し迂回避難しながら同行支援するという訓練シナリオを実践した。
- 元宮司の要支援者 C さんを、C さん家族が D さん夫婦と協力しながら、支援者として体を支えながら一緒に避難するというシナリオ。
- 社務所(標高 10m)は津波浸水想定内のため、23m の社殿まで避難する必要があったが、それには、急な階段 45 段を上らなければならなかった。
- C さん(要支援者)家族の平日昼間の在宅者は女性 2 名(そのうち 1 名は後期高齢者)であり、要支援者を支えながらの避難は相当の困難が予想された。
- D さん夫婦は社務所前で、C さんを支えながら避難している C さん家族と合流し、階段のところで D さん夫と交代し、2 人で両側から支えながら社殿前まで上り切ることができた(避難完了)。
- ケース②の避難時間は、避難場所(社殿前)への到着まで計 15 分を要した(避難準備時間 5 分、徒歩での移動時間 10 分)。この時間も、想定津波の到達時間(16 分)とほぼ同じ時間である。
- 避難訓練初参加の C さん家族は、「(支援者の支援を受けて)やればできると分かった」と前向きな感想が述べられた。
- 区長も「初めての訓練参加が大きな一歩」と評価した。

■6. 2026 年度の珠洲市の動向

(1) 復興公営住宅の募集案内

- 寺家(4 区)には三崎町寺家団地として長屋タイプで約 10 戸が整備予定で、令和 10 年度の入居予定とある(「広報すず 6 月号」No.857、2026 年 6 月 1 日発行)。
- 下出区としては、戸建てタイプ 2 戸の要望を持っていた(一定年数後に払い下げ)が、現時点で実現していない。

(2) 自主防災組織づくりの本格化

- 5 月 13 日に珠洲市による「防災組織づくり」説明会が開催された。
- 三崎地区全体を対象に地区防災計画を作成し、住民の組織化を進める方針である。
- 下出区では、区単独での地区防災計画の作成を市に相談した経緯がある。
- 吉川は「下出区の取り組みは全国的にも先進的で、十分モデルになる」と評価している。

(3) 個別避難計画(災害時要支援者避難支援対策)の推進

- 制度改正により、福祉専門職が個別避難計画の作成を担えるようになった。
- これまで、「支援者を事前登録する方式」は関係者の負担が重く、実効性のある計画づくりが進みにくいとの指摘があった。
- 珠洲市では、避難支援訓練実施後に、個別避難計画の作成を広げようと考えている。
- 下出区の「シン避難訓練」で試行されている「通行車両による“ゆるやかな支援”」方式は関係者の負担が少なく、実効性が高いと考えられる。
- 区長も「役所方式は重すぎる。下出のやり方の方が現実的」と述べた。

以上